

きらり 企業

箱の中のボルトやナットが回転盤で運ばれ、おわんのような受け皿に吐き出されていく。電気と磁石でボルトやナットを吸着し、センサーで一本ずつ正確に数える仕組み。外部からの通信で、受け皿に出てくる数量を調整することもできる。自動車の生産ラインで使う部品を必要な分だけ供給する装置「パーツカウンター」。部品定数供給装置とも言われる。

作業員が車種ごとに使うボルトやナットを手にとって数える手間が省ける。さらに酒井高雄会長(70)は「ネジを締めるために必要な数と供給する数を同じにすれば、締め忘れや、エンジン内に部品が落下するといった人為的ミスの防止にもなる」と強調する。

もともと日産自動車(横

マイス

(川崎市高津区)

部品定数供給装置で夢実現

浜市)で生まれた技術だが、第三者に利用を認める日産の「開放特許」を活用。2014年に初の自社製品として売り出すと、「作業が効率化した」などとヒット。販売台数は14年度の32台から15年度は75台と急増した。

「一旗揚げたい」と、大手

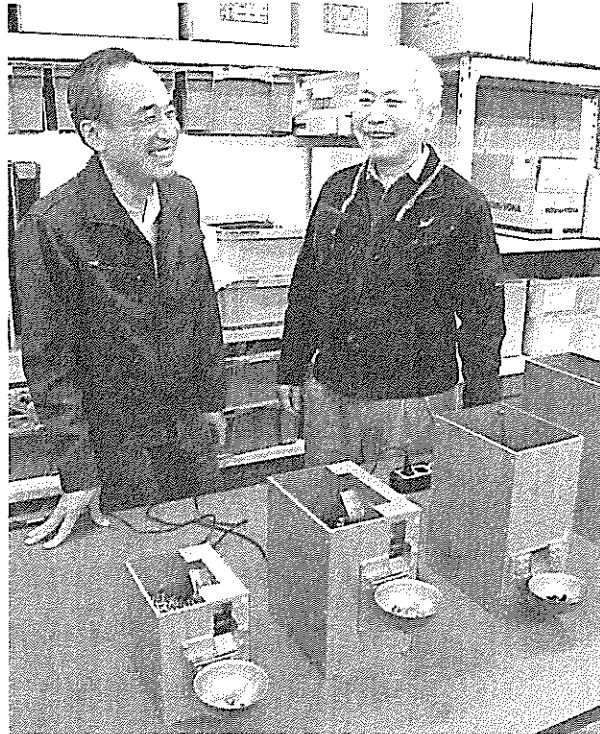
光学機器メーカーの生産設備部門で26年間、機械設計や装置作りをした酒井会長らが同社を設立したのは1991年3月だった。

プリント基板の電子部品供給装置の開発を始めたが、需要がなく半年ほど見切りをつけ、機械の組み立て装置や

検査装置を設計・開発する事業に移行した。酒井会長は「思い込みが強すぎて時代にマッチしていなかった」と振り返る。

ただ、数多くの設備を手がけ、技術力には自信があった。「他社では作ることができない装置を創り出す」のが企業理念。それだけに、「自社製品の開発」という夢の実現を強く思っていた。

転機は2013年7月。川



従業員も3人から6人に増え、さらなる開発に意欲をみせる酒井会長(右)と秋山社長(川崎市高津区で)

1991年設立。顧客の要望に応じて組み立ての自動化装置や測定器などの装置をオーダーメイドで設計、組み立て、据え付けを行う。工程を外注せず、現場の使いやすさを最優先する製品が強み。資本金2000万円。従業員6人。

崎市産業振興財団の担当者から声をかけられ、開放特許など知的財産を中小企業に移転し、新製品開発などを後押しする「市知的財産交流会」に参加したことだった。同財団は、同社の技術力や設計力の高さ、丁寧な仕事ぶりに着目していたという。

交流会で酒井会長と秋山昌宏社長(52)、社員の鈴木啓之さん(49)は、「我々の技術力をもってすれば作れる」と確信した。13年12月に日産と使用契約を締結。14年1月に第1号を完成させ、改良を重ねて小型化・低価格化を進めた。ある大手メーカーでは同じ作業で最大17%の効率化に成功したという。

金属部品だけではなく、樹脂部品の自動供給装置「樹脂ファスナーカウンター」も開発。販売ルートを新規開拓した18年度は国内外で310台が売れた。秋山社長は「国内の需要はまだまだある。年間1000台が目標」と意気込んでいる。

(荒木香苗)